



ホラー小説  
「忘れ傘」

赤鈴

## 雨の日の忘れ物

---

「やべえ！降ってきたか」

時刻は夜の9時、外はすでにどしゃ降りの雨。

「どうすっかなあ・・・傘持ってきてないしなあ」

途方に暮れる正幸。

ふと会社の傘立てに1本の白い傘が置いてあるのに正幸は気がついた。

少し古い傘だがまだ使えそう。

首をかしげながら正幸はポツリとつぶやいた。

「おかしいなあ。会社にはもう誰もいないはずなのに・・・。誰かが忘れてったのか？」

少し悩んだ後、その白い傘を手取る。

「明日返せばいいんだし、使わせてもらうか」

傘を差して正幸は自宅へと急いだ。

正幸の自宅は会社からそれほど遠くない場所にある。

「ただいま」

一人暮らしの部屋に空しく正幸の声が響き渡る。

「疲れたあ～」

正幸はベッドに倒れこんだ。

「傘、明日返さなきゃな・・・」

そうつぶやくと正幸は深い眠りへと誘われた。

その時、正幸は夢をみた。

何もない真っ白な空間に女性が1人立ってこちらをじっと見つめている。

赤いワンピースの似合う綺麗な女性だ。

何かをつぶやいているようだが正幸には聞こえない。

「なんですか？」

正幸が女性の話を知ろうと近づこうとすると、そこで目が覚めた。

「夢・・・か」

時計を見ると時刻は深夜3時すぎ。

「まだこんな時間か」

寝ぼけ眼をこすりながら正幸は大きなあくびをした。

そして正幸がもう1度寝ようとした時だった。

トゥルルル！！トゥルルル！！

突然電話の着信音が鳴り響いた。

「こんな時間に誰だ？」

正幸は恐る恐る電話の受話器をとり、耳を傾けた。

「もしもし？」

正幸が問いかけても相手は何も喋ろうとはしない。

しばらくの間、沈黙が流れる。

「どちら様ですか？」

受話器の向こう側から女性のかすれた小さな声が聞こえた気がした。

でも何と喋っているかまでは分からない。

正幸はだんだんと腹が立ってきた。

「イタズラ電話ですか？だったら切りますよ？」

正幸が受話器から耳を離そうとした時だった。

「返せ・・・」

今にも消えそうな女性の小さな声でたしかにそう聞こえた。

「もしもし？あなた誰ですか？」

正幸の問いかけを遮るかのように電話は切れた。

「なんなんだよいったい・・・」

正幸は電話を見つめながらしばらく呆然と立ち尽くしていた。

## 込められた想い

---

「おはようございます！」

翌日、正幸は会社にいた。

正幸は大きく口を開けてあくびをした。

「寝不足か？」

同僚の拓也が心配そうに問いかける。

「まあな。昨日変な電話があっさ」

正幸はダルそうに答えた。

「電話？」

「ああ。深夜3時くらいに女性の声で " 返せ " って電話があっさ。もうまいったよ」

「 " 返せ " って何をだよ」

「知るかよそんなもん」

再び大きなあくびが正幸の口からこぼれる。

この時、正幸は傘の事をすっかり忘れてしまっていた。

「でもさ、相手はお前に何か貸したから " 返せ " って言ってきたわけだろ？心当たりとかないのかよ」

「そんなこと言われてもなあ〜・・・」

首をかしげて考え込む正幸。

ふとあの夜の傘の事を思い出す。

「あっ」

「心当たり・・・あるのか？」

「傘。白い傘がさ会社の傘立てにあったから借りたんだよ」

「きっとそれだよ！お前が勝手に傘を持ってっただけだからその女性怒って電話してきたんじゃないのか？」

拓也のその言葉に正幸はハッとした。

「やっぱ返さなきゃマズいよな？」

「当たり前だろ。今度もしその女性から電話があったら必ず謝れよお前」

「分かったよ」

正幸は次の出勤の時にでも傘を忘れずに持ってこようと決意した。

その日の会社の帰り道の事だった。

「あんた・・・死相が出ておるな」

どこからかおばあさんの声がした。

「そこのあんたじゃよ。あんた」

正幸がふと声のした方を見ると、そこには占い師風のおばあさんが立っていて正幸の方を真っ直ぐ見つめていた。

「私・・・ですか？」

「そうじゃあんたじゃ。あんた最近自分の身の周りで変な事や気になる事はなかったか？」

心当たりはあった。例の女性からの電話だ。

正幸は例の女性からの電話の事や白い傘の事をその占い師風のおばあさんに話した。

誰かに話を聞いてほしいという気持ちも正幸には少なからずあった。

「その傘、今どこにある？」

「たぶん家だと思います」

「見せてもらうことはできるか？」

「大丈夫ですよ」

正幸とおばあさんは正幸の自宅へと向かった。

「これがその傘です」

「ふむ・・・」

おばあさんは問題の傘を見ながら難しい顔をしている。

「あんた、これをどこで拾ったんじゃ？」

「会社・・・ですが」

「本当に会社か？」

「ええ。間違いありません」

おばあさんは少し黙った後に口を開いた。

「結論から言うと、この傘は非常に危ない。なぜかは知らんが凄い怨念が宿っておる」

「この傘にですか？」

正幸は半ば半信半疑だった。

「物にはそれぞれその人の色んな想いが込められておる。この傘も然りじゃ」

「想い・・・ですか」

「そうじゃ想いじゃ。それもかなり強い想いじゃ。悪い事は言わん。すぐに神社に持って行ってお祓いしてもらいなされ。私が良い神社を紹介してやろう」

「ありがとうございます」

正幸はおばあさんに深々と頭を下げた。

おばあさんは何かを思い出したかのように一言付け加えた。

「それと、これは忠告じゃ。今夜の深夜2時～夜が明けるまで何があっても絶対に玄関を開けてはならんぞ。いいな！」

「それはなぜですか？」

「最初にも言ったがあんたには死相が出ておる。死にたくなければ開けるな。いいな。夜が明ければもう大丈夫じゃ。それまでの辛抱じゃ」

「分かりました」

そう言い残すとおばあさんは去って行った。

正幸はさっそくおばあさんに紹介された神社に行き、事情を話してお祓いしてもらった。

傘は神社の方で預かってもらうことになった。

そしてその日の深夜。時計の針は2時を示していた。

トゥルルル！！トゥルルル！！

電話の着信音が鳴り響く。

正幸の額からは冷や汗がにじみ出していた。

「もしもし？」





正幸は今日ほど神仏に助けを求めたことはなかった。

しばらくすると玄関の方が静かになった。

「諦めて帰った・・・のか？」

正幸は少し安堵した。その時だった。

「キサマガワタシノカサヲトッタノカ？」

正幸の耳元であの女性の声がした。

正幸が振り向くと、そこにはいつか夢に出てきたあの女性が鬼のような形相で正幸を睨みつけていた。

「カエセエエエエエエエエ！！！！！」

正幸はそこで気を失った。

次に正幸は目を覚ました時にはすでに夜は明けていた。

ピンポン！

玄関のチャイムが鳴った。正幸が恐る恐る玄関を開けるとそこには昨日のおばあさんが立っていた。

「生きておるようじゃな」

「な、なんとか・・・」

正幸は疲れ切っていた。

「安心せい。もう大丈夫じゃ。わしと神社の神主さんで女性の霊はちゃんと鎮めておいた」

「そ、そうですか・・・それはよかった」

「これに懲りたら無闇やたらに人の物には手を出さんことじゃな」

おばあさんは笑いながらそう言った。

「もうこんな事は二度と御免ですよ」

正幸は腰を抜かしながらそうつぶやいた。

後日分かったことだが、昔正幸と同じ会社に勤めていた女性が雨の降りしきる夜に会社の屋上から投身自殺していたというのが分かった。

その女性はいつも赤いワンピースで、白い傘を差していたという。

自殺の理由は彼氏の浮気だった。

その傘は彼が唯一彼女にプレゼントしてくれた物だったのだという。

雨の日に傘を忘れたとしても人の傘を無闇に持って行ってはいけません。

もしかしたらそれは・・・。